

いまから思えば2度目の渡米であったから1970年だったと思う。ちょうど刀根先生が居合せた時、ピーターという先生が東京から帰りだといって刀根先生に逢いにきた。その時、本人は美術大学の先生であるが「具体」の研究家ですといったのには、なんとなく驚いた。その時、何となく思ったのは、日本人がエコルドパリを研究するといった、たぐいの観念が私の頭を占領していて米国人が日本の「具体」を研究していると聞いてビックリした。その時、ちょうど刀根先生は仲間と一緒に戦後美術の総繩の仕事美術手帖をやったばかりで熱がはいっていて、先生自身を含めて日本の、アメリカの前剤にはくわしかった。そんな時、サンフランシスコで「具体を研究」をしていますというアメリカ人は奇異に映り、いまから思えば、彼の先見性に驚かざるを得ない。その頃は一ドル365円の公定があった時でヤミでは1ドル400円であった。勿論、貿易摩擦なんてものではなく米国が一方的に全世界に売り込んでいた時代であった。

そして、はるかな昔、九州派は昭和31年11月2日の「ペルソナ展」をもって始まりとして32年3月には第9回読売アンデパンダン展に石橋奏幸150号3点、オチ・オサム150号3点、桜井孝身130号5点を出品、それ以降、全員が読売アンデパンダン展に出品するのだが西暦でいえば1957年いまは1987年だから31年前のこととなる。何故、こう書くのかといえば「現代美術逸脱史」千葉成夫先生の具体の年表のところに1957年4月、第3回具体美術展（京都市美術館）とある。このことは我々がはじめて出品した読売アンデパンダン展が、3月とあり、具体が4月とあるので、東京滞在を少々のばして京都で具体展を見たからである。もう、すでに31年前のこと。記憶は信用できないが、その時の具体展を見て、私は私なりの具体研究が始まったのである。

私が興味あるものとして、その後、具体展が九州の長崎に来た時、九州派は、なにがしかの、少額の当時、いわゆる汽車賃を出し、山内重太郎先生に行ってもらったことを覚えている。彼が持ち帰った展覧会のパンフレットは当時のものとしては相当部厚いものであった。いかに当時の美術誌から具体を知ろうとすることは大変むずかしかったか、断片的にはあるが、「グタイ」という名前とか、季刊誌の発行とか、その季刊誌もそう大したものではないということ。吉原先生はお金持ちだが会費はメンバーが公平に出しているとか、正確であるかないかは知らないが、私の耳にはそれらのことがいまだに残っている。